

私の授業～うまくいったこと、いかなかったこと

所属	社会学科	氏名	坂口 緑
テーマ	マニュアルに頼る		
<p>明治学院大学で教壇に立つようになってから 15 年が経過した。当初、授業やゼミの運営をどうすればいいのかまったくわからなかった。現在のように、大学教員志望の学生に対する指導などまったくなかった時代である。仕方がないので、自分の学生時代の経験を振り返るものの、思い浮かぶのはたいていそうありたくないというモデルばかりで、まったく役立たなかった。そんなとき、藁にもすがる思いで図書館に行き手にしたのが、小学校教員用のマニュアルだった。</p> <p>全国で 40 万人以上いる小学校教員のために、各出版社は多様なマニュアルを用意している。また、近年の動向や外国の事例について熱心に学び合う研究会も数多い。小学館は『総合教育技術』という雑誌を発行している。私は大学図書館に行き、数冊を手にとった。ありがたいことに知りたい情報のすべてが書かれていた。例えば、基本的な教室運営の方法である。授業の始まりは「これから始めます」と発話すること、教室を巡回するときは、ゆっくりと歩くこと。新人の私はさっそくそれらをどきどきしながらやってみた。それから、教科書や資料を用いるときは指示を明確にすること、できれば繰り返すこと、とも書いてあった。これもすぐに取り入れた。「レジュメの 2 枚目を見てください」と 2 回、繰り返すようにした。すると私語はさっと止み、受講生がレジュメの 2 枚目に目を落とす。その確実は成果に、私がいちばん驚いた。なかでも何よりも役立った助言は、授業に出席している人が何をすればいいのかわからなくなるような不明瞭な時間をおかない、という点だった。問題を解かせたいのなら、どの問題を何分考えるのか指示すること、問題は板書するか投影するなどして必ずビジュアルライズすること、資料や映像を見せるときは、それがどのテーマにつながるのかを必要に応じて開示すること、といった解説である。これはゼミを進める際にも大いに役立ち、現在もずっと意識している技術である。</p> <p>現在、「アクティブラーニング」というのが特別な手法であるかのように日本では語られている。自分で問いを立て、仮説を考え、小集団で議論し、検証するといった内容である。ただ、調査でよく出かけるデンマークの知人にそのような話をすると、「アクティブラーニング」という言葉自体が通じなかった。何かを学ぶということは、能動的なことである。それがあまりに当たり前すぎるからだろう。ただし、能動的な学びを引き出す技術は、常にブラッシュアップする必要があることをも実感している。『総合教育技術』はこの数年、アクティブラーニングにも力を入れ何度も特集をしているようだ。すっかり中堅（中年）教員となった今こそ、再度、精読すべきだと感じている。</p>			